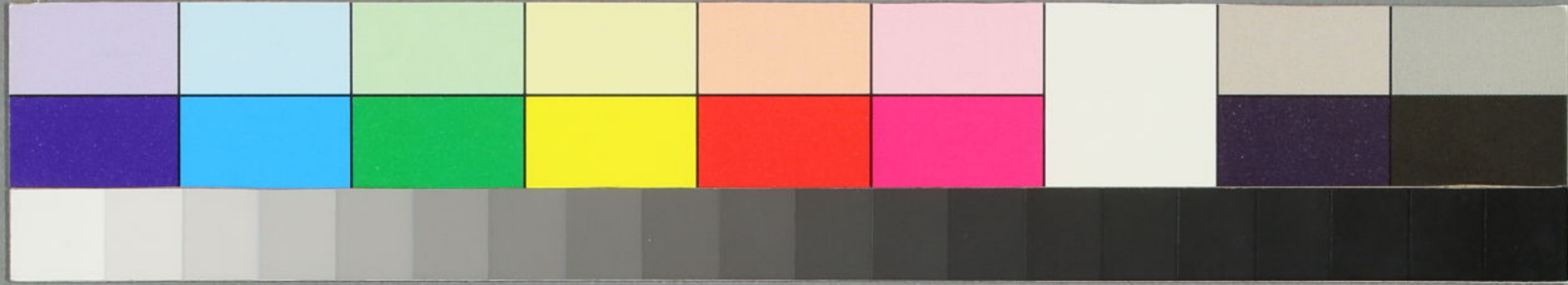


俳諧袖珍鈔
四

^ 5
1128
4





冊
八五
巻

袖珍抄附金歌仙之部巻二

古繪舎黙池輯

秋の日記

菟草 一巻 砂川集 一巻

蒸香仙 一巻 市の危 一巻

阿つ又山 一巻 白兄史 一巻

神茄子 一巻 菊の巻 一巻

花 描 一巻 刀ふら山 二巻

雪九け 三巻 己の光 二巻

別注書 一巻 壬生山家 二巻

小文庫 二巻 多於碑 一巻

笈日記 一巻 鄙懐談 九巻

柔の巻 一巻 夢と秋集 一巻

顔巻 一巻 夢と秋集 一巻

十六歌集 二巻 拾遺 一巻

巻二 秋の日記



蘇草

物の中やわたりきやをば 史邦
 ねのきくと地州崎やせ 法圃
 井帯中をぬく月の出るり 蘇
 席下はすくゆき枝の向 魯
 ともや守はよむまに 蘇
 粟丸をたの川上のや 史
 ころくとねはせき石於 可
 寺り海路はけくまの 蘇
 子母くゆくゆく 史
 祖父のゆくりは 法圃
 子母くゆくゆく 蘇
 陰るをうけく 可
 きしくと宮路は 治
 見世をゆき目より 史
 狭持とる 可
 後夜病のや 蘇
 すんまると 可
 光りま 可

三

花の上吹去るら 史
 紫のさくらさくら 可
 色づく 可
 葉のりり 史
 緑土麻 蘇
 糸糸 可
 うたのれ 可
 名古 蘇
 悴る 可
 枝とぬら 可
 法 史
 ち 可
 知の 可
 夏古 乙州
 白 法圃
 滝 里
 浴物 州
 未良 法

蕙歌仙

馬よりしてき遊りふまを 枝
 糸野をみくく山は曲りめ 枝
 舟とくお捜し後海ぬきと 枝
 船くくくくくくくくくく 枝
 鳥園と櫻れ志とむま 枝
 紫よりとくす峰れ巻さ 枝
 雲よりとたれ山と巻のち 枝
 狂女四五人回をくくく 枝
 落出と敷きききききき 枝
 髪り刺しと魚くくくく 枝
 華れ巻くもか 飛ゆき 枝
 先程の真をつくくくく 枝
 鳥のれ巻くもか 飛ゆき 枝
 衣のよりとくくくくく 枝
 秋風は物とぬ子の後ま 枝
 白紙杖のつとくくく 枝
 花のよりとくくくく 枝
 巻袋のこせとくくく 枝

三

長ふさやちら難波は真夜 枝
 沼れ小湯をよけ弁枝 枝
 舟とくお捜し後海ぬきと 枝
 船くくくくくくくくくく 枝
 鳥園と櫻れ志とむま 枝
 紫よりとくす峰れ巻さ 枝
 雲よりとたれ山と巻のち 枝
 狂女四五人回をくくく 枝
 落出と敷きききききき 枝
 髪り刺しと魚くくくく 枝
 華れ巻くもか 飛ゆき 枝
 先程の真をつくくくく 枝
 鳥のれ巻くもか 飛ゆき 枝
 衣のよりとくくくく 枝
 秋風は物とぬ子の後ま 枝
 白紙杖のつとくくく 枝
 花のよりとくくくく 枝
 巻袋のこせとくくく 枝

和歌集 卷之九
 路しや山と山との絶たぬ
 樹子よれをを深う井戸
 清城の雲かきかき授けて
 雲生れ事乃三月月
 我身ちりりりりりりりり
 路をゆゆゆゆゆゆゆゆ
 山は深きええええええええ
 葉のまきまきまきまきまき
 りりりりりりりりりりりり
 ああああああああああああ
 存存存存存存存存存存存存
 報文いんいんいんいんいん
 きぬくおまおまおまおまおま
 宿れ女乃ぬきりのりりりり
 借入のむくむくむくむくむく
 もくもくもくもくもくもくもく

三三
 金銀のそも一ちく改まり
 赤らけれ都く立寄るや
 比雲ふかあこれと谷物で
 麻草ぬくれ化れうつ
 遠けさ目をほほほほほほほほ
 ころろころろころろころろ
 子月れ危をゆすお小ね系
 地守の売をゆすお小ね系
 夕八嶺れあまうとまきまき
 こけこけこけこけこけこけ
 ぬくぬくぬくぬくぬくぬく
 温るぬくぬくぬくぬくぬく
 初層のほりゆりゆりゆりゆり
 山をたゆゆゆゆゆゆゆゆ
 尾をちりちりちりちりちり
 りりりりりりりりりりりり
 花の耐時とやらのゆきゆき
 花の耐時とやらのゆきゆき

五か名をさそを守風書 九
 後予と人のむさし文草 九
 川舟此強之巻を引立て 九
 特れとあつとらんあつ三月 九
 池あつとらんあつとらん 九
 きたつとらんあつとらん 九
 晩つとらんあつとらん 九
 玉里此梅を本巻此巻 九
 山つとらんあつとらん 九
 舟持つとらんあつとらん 九
 舟と文の巻を引立て 九
 更つとらんあつとらん 九
 古御所をさそを守風書 九
 系と多枝子さそを守風書 九
 月と多枝子さそを守風書 九
 雙あつとらんあつとらん 九
 中つとらんあつとらん 九
 的場の子供とらんあつとらん 九

冬を評し七の力なる 九
 汲つとらんあつとらん 九
 あつとらんあつとらん 九
 故れつとらんあつとらん 九
 かさ備とらんあつとらん 九
 事あつとらんあつとらん 九
 うは雪の梅のれ梅此巻 九
 渥あつとらんあつとらん 九
 龍乃巻とらんあつとらん 九
 すかつとらんあつとらん 九
 月れあつとらんあつとらん 九
 銀はつとらんあつとらん 九
 ちりつとらんあつとらん 九
 明多つとらんあつとらん 九
 笠人つとらんあつとらん 九
 新あつとらんあつとらん 九
 雪れつとらんあつとらん 九
 幕あつとらんあつとらん 九

雪丸 け 春田 古 平 幸

さきこれをおのり運上川 而
 岩と岩をばま 船杭 一 采
 瓜畑いさよ 水と 氣と ちり
 里とむらう 素れ 細な 川水
 水れうらうら 慰む 夕なれ 采
 向きおや 惜乃 吟 取
 鏡堂と松 あり 山 ちりし 水
 相むすいおく 園乃 崎月 取
 永樂れ古き 古れ せ たり 取
 友しあはらう 大なる 秋 采
 炮おはらと ありき ちり 取
 丸おらうら 双た 乃 水
 控上る 屬う 四ん 運て 采
 けり 小人 古き 秋風 取
 水 碧る 井の 月 古き 水
 きぬらうら ちり 出さ 取
 秋の 後志を 感らす 采
 採らん けり 山 陰の 水

三ツ 鎌多村 八 浮世の 井は 古 爲て

刀持をる 甲 級友の 一 丸 取
 舟 渡人も 運ら ぬ 雲 也 水
 物く 夜と 割る 松の本 采
 果 あり 蟹の ちり 採 取
 集 又 採 女れ 志を ちり 取
 若 山 田 又 ちり ちり 採 取
 此 中 ちり 出て ちり 採 取
 合 飲 ちり ちり 採 取
 ちり ちり ちり 採 取
 古 此 ちり ちり 採 取
 云 采 採 ちり 採 取
 ちり ちり ちり 採 取
 採 採 の 目 ちり 採 取
 ちり ちり ちり 採 取
 や ちり ちり 採 取
 ちり ちり ちり 採 取
 山 田 の 採 ちり 採 取

雷九け

お尋大我宿世に被れ寝 風流
 ろく之てのを風はまめ 弱
 東作の歌を抄師て 孤松
 主方立く寸如乃り子作 中書
 押くろぬる月三子で 柳
 る市くわて約む人せん 半
 煉けく父方老を 弱
 茶試くそおを 弱
 梅をたふすしやき度 弱
 在るれをわけて 弱
 之相さるるまに 弱
 満はまきくを 弱
 空くらぬおのれや 弱
 萩流くける 弱
 りり月を抄の不社 弱
 寂あつりんと 弱
 去るをけ今衣と 弱
 かけろよきゆる海天の 弱

三

お尋と茶を抄く 弱
 累かた悪くたりき 弱
 袖をながり 弱
 清くんのま 弱
 志傳のつて小 弱
 茂士みられ 弱
 おのきく 弱
 羽織てつむ 弱
 秋をて 弱
 うくすま 弱
 身あり 弱
 御座れ 弱
 幸に 弱
 よとわて 弱
 ろくく 弱
 あま 弱
 嘆うら 弱
 うを 弱

善い家

うらり きぬの穂をまのり道
 厚もく水は海地の水 豊
 多雲は因り福をそめて 福
 揺動の火をきく夕月 正秀
 たるまはて新夜はなまを 此終
 すりりて乳をきくまはち 乙州
 冥ちまもやちみくま好 畫好
 方ハ書書と申して情し 松頑
 玉ふつきと秋をきく火 聖
 重塔ふく洞はより火 正未
 四井中よりも晴のちま 櫻
 そ括のれれはまはち 海力
 陸嶽よりちま月をきく 秀
 抱きまもむら若れは 色
 月影二二能の料をきく 好
 若まの白ひのいさく 赤
 かなる家海子れかの雲を 力
 東風吹ちる南風の舞 子

ニラ

たよまは勢わくくねやん
 互層上より何けく密村
 昨あゝ義理を評して用多
 是れと務りしものほめん
 うすやうはまもま書書の
 はれさうくく月此廻序
 く我の志を志の体と打歌
 くの如のふまをきく寸也
 弓と矢をきくくく小書き
 あく製作く書中書書書
 子祝書籍く書を組ま
 ねのふくのいしけれ子の藤
 又のふくま又選くく物
 けねややる書はくく書
 せまんとる書をきくくく
 子辰辰とむ子辰辰の福
 内村ちんちんま書書書
 乙をけ出入福やく物書

秀 頑 州 子 秀 色 好 赤 力 子
 頑 好 色 好 赤 力 子
 頑 好 色 好 赤 力 子
 頑 好 色 好 赤 力 子

韻塞 十月廿六年

夕空ありてしし初霜の
 叶の仕付くまはれあし玉 許六
 仲夏を賞らん小粒の味は
 けれ入る秋の風は 然
 ちの月奥く入るちち 鹿茶
 先子まゝの地味の病や 弊
 方針の傍書や情書れて 水
 焼菓のしるも糖もみず 魚
 鯉つひ母の味色のぬり 六
 振腹とのちちちち又は 茶
 中ふの権人かおや 水
 和直片々も情はあま 茶
 香るあやも秋はまは 魚
 わり秋の風をさき 六
 八月の夜あけりるさ不夜 茶
 院山麓に茶の志をけ 水
 お茶の煙も茶の味を 水
 ばくも茶の味をの卵も 魚

ニラ

若深く遠志は茶をまや 六
 茶麻の煎とほ小粒を 茶
 さりては能く茶をまは 水
 お茶の味を茶の味を 水
 灯の影めつらさ甲竹 魚
 山崎もやまをさる茶 六
 児連の餅は茶の味を 茶
 尻月小かす茶の味を 茶
 いらやの味も茶の味を 水
 琵琶を吹く茶の味を 魚
 多岐の流石も茶の味を 六
 古れやうな茶の味を 茶
 一茶も茶の味を茶の味を 茶
 藤崎も茶の味を茶の味を 水
 茶の味も茶の味を茶の味を 魚
 茶の味も茶の味を茶の味を 六
 茶の味も茶の味を茶の味を 茶
 七十の茶も茶の味を茶の味を 茶

白足者 十二月廿五日

おうりては入さる花枝 在
 障也やこれお空の者 粟
 目よたぬつら者よひて 晋
 相成れよさふり交際ふ 茶
 夕月のたふさけをいふ 餅
 出うりて思く秋をせりき 餅
 阿ふちる夜いひある 粟
 肩てやうかたを昇の親 晋
 望えよ葉枝を射しけの茶 杏
 茶よきそと守初瀬れ 在
 下注は及古んてす 山
 けあふに梅れ方とひさる 在
 むりやけさきう也 粟
 況は及と悲やせりて 晋
 是れ向空の才と願え 在
 三寸の梅りととむ 餅
 才とてと遠ととあす 晋
 茶と茶ととととととと 粟

三

思うれはあふし 在
 そつとあふととととと 山
 山をれつととととと 在
 樹かかつととととと 晋
 うけい梅へととととと 山
 けりてあふととととと 在
 氣とてととととととと 在
 其もとととととととと 粟
 又ぬつととととととと 晋
 甘うとととととととと 在
 珍しき果を焼く 粟
 己とつととととととと 山
 松葉をまのつとととと 晋
 そくさいととととととと 在
 光とつととととととと 在
 蘇れとととととととと 粟
 付さうととととととと 山
 こつとととととととと 在

乙の光 懐筆亭

あつて東の海や花を
 持たうらと何々雲の娘
 新月おぼろしく道付く
 茶はたて下るる懐筆のひま
 かへうと楊と楊とす難う取
 病屋さうに續きさう
 菊香れさうに菊香れさう
 名さうと地下さうとさう刺
 炭飯と刺し中れさう
 おりひ家さうにさうさう
 ははらふ扇は扇はさう
 何さうに西月とさうさう
 須美の山流れ家と家と
 角力さうにさうさう
 山流れ山流れ村のさう
 菊香れさうに菊香れさう
 持たうと紫さうとさう
 おりささうとさうさう

花 雲 娘 道 付 茶 菊 楊 菊 刺 炭 菊 扇 西 須 角 山 菊 持 山 菊 紫 菊

三

仲より井川原のさうとさう
 月影さうとさうさう
 大名は侍のさうとさう
 びさひの鼻のさうとさう
 一升八代とさうとさう
 盤はさうとさうさう
 膝上草を油に取ら
 龍のさうとさうさう
 さうとさうとさうさう
 千燈子れさうとさう
 神さうとさうとさう
 さうとさうとさうさう
 家さうとさうとさう
 如き入遠入舞はさう
 耳たさうとさうとさう
 川儀のさうとさうとさう
 大さうとさうとさう
 末代湖子のさうとさう

井 月 名 鼻 一 盤 膝 龍 さ 千 神 さ 如 耳 川 大 末

壬午
 壬午
 壬午

郡懐紙 雨中

傘小地一のけりてはる 前
 わり子まむはれ葉はし 雨
 繼丹いすの巨魁工まを分 葉
 使の者上礼の少てや不 野
 波濤まより初代よりり 利
 巻ら終て又出守吸との 家
 湯入元の入まけり葉は葉 葉
 といふはは葉は葉園葉葉 子
 りかも是るまをよての 牛
 いはれ達又葉葉ましはる 所
 おしりりりりりりりりり 坡
 名を拂名月すては延らぬ 葉
 けりりりりりりりりりり 言
 秋もや所へはかりりりり 角
 は清りりりりりりりりり 彼
 互りりりりりりりりりり 牛
 孰の味をよりりりりりり 子

三

二葉は葉りりりりりりり 神
 浪りりりりりりりりりり 石
 如葉はびりりりりりりり 牛
 先も樹はりりりりりりり 葉
 びりりりりりりりりりり 神
 ねんも母りりりりりりり 神
 木葉りりりりりりりりり 石
 長切りりりりりりりりり 子
 名は子りりりりりりりり 石
 急件りりりりりりりりり 牛
 四五十日ふれあくち茶 神
 葉はは葉りりりりりりり 水
 ありりりりりりりりりり 葉
 男は葉りりりりりりりり 神
 挿入りりりりりりりりり 牛
 切掛りりりりりりりりり 子
 陽光りりりりりりりりり 石

御懐哉

懐哉 懐哉 懐哉 懐哉 懐哉

條の奇 條の奇 條の奇 條の奇 條の奇
 牡丹のふとね 牡丹のふとね 牡丹のふとね 牡丹のふとね 牡丹のふとね
 みつねも 夕の影 夕の影 夕の影 夕の影 夕の影
 登りて 登りて 登りて 登りて 登りて
 雲より 雲より 雲より 雲より 雲より
 出はく 出はく 出はく 出はく 出はく
 鳴り 鳴り 鳴り 鳴り 鳴り
 つりも つりも つりも つりも つりも
 大け子の 大け子の 大け子の 大け子の 大け子の
 箱する 箱する 箱する 箱する 箱する
 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い
 生ね 生ね 生ね 生ね 生ね
 美子 美子 美子 美子 美子
 卯の 卯の 卯の 卯の 卯の
 足より 足より 足より 足より 足より
 ねん ねん ねん ねん ねん
 ねん ねん ねん ねん ねん

三

虎の 虎の 虎の 虎の 虎の
 浴する 浴する 浴する 浴する 浴する
 池の 池の 池の 池の 池の
 海 海 海 海 海
 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い
 酒の 酒の 酒の 酒の 酒の
 人 人 人 人 人
 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い
 海 海 海 海 海
 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い
 火 火 火 火 火
 池 池 池 池 池
 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い
 池 池 池 池 池
 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い

鄒恬然

多仙いんる方をまよふり 陳
 かのの細目よりく歳旦 香
 我猶と聲を猫通ひ信儀 翁
 了わと終る結徒のき 無仙
 鈴貝のつぬ糸風のからみ 千川
 仁とてつれつらつらつ 香
 舞入る柔妻と己らととて 昔
 恋る古風の跡の奥より 翁
 移るの舟虫つけはる中ん 仙
 飛もまうしう育つ雛子 通
 汗墨と持つてささる布袴 翁
 餅をれへまゝ名月此を 昔
 くらくと紫衣袖此衣の香 川
 一解あくる唇の粉吹 仙
 折つて修屋すそまの物費 通
 礼より後の志ぬ手号 翁
 杖猶や下りて下すの奥 川
 雪衣のまをゆるく香風 通

びるはく(と)信者之存とりて 翁
 彼者へ入る静きこゆく 仙
 けりふ中と我子と信るも 昔
 いそぬかりひのまゝ酒息 川
 え緒のまわしてかゝる衣のき 通
 人此情をつくく措ぬ糸 翁
 淨りぬり寂嘆杖はぬき 仙
 陀諦さかす本を此持の妻 通
 月此端専らまをちあふ 翁
 折るも身はるつらつらり 昔
 衣人此知ぬとまをぬき 川
 志らく信る身とくつ信 翁
 御幸もまひは見えぬ形 通
 塘れ家と信はむゆき 川
 わけれは代のうとたぐ毎 仙
 阿つきかゝらなかなる香柳 通
 花盛静る舞と形足とて 翁
 うとを折る中たらし香 昔

鄙懐紙

有様や世を痛の雨井此初由 翁
 暮りてきし卯座む語 湯子
 織物も宿とびりちるる 漆
 折くすむむく此初の本 翁
 う次得折干編信れ生とる 子
 後くむ守も又えぬ於方 衆
 翁を此上村と狐と叩き入 翁
 後れす清工のくはる縄 子
 翁食心六塊魁の始りく 衆
 堀とひひくくはぬる東 翁
 月さうり八孫と吸筒抱きそ 子
 和回終了しては独差當心 衆
 掛乞れ其くくは城を荒り 翁
 翁居よりくは月は枝折戸 子
 空をいともは清け殿にれ 衆
 松も送も急件乃く子 翁
 翁のなれ命とらり流の位 子
 破子のさぬぬ當れを 衆

三

色むかをそそれつれ衆 翁
 日記つりり一姑此初 衆
 藤蔭やきと五月の初より 子
 名跡とうせくあ蓋此初由 翁
 去任いんらぬ毎もまやく 衆
 久米とわく酒此初由 子
 焼くそを子饅頭くこれ月 翁
 赤うくう通も乳をき風 翁
 上布舞ハ飯後若き移そ 子
 うた名い辰此市て懸まる 翁
 ぶら酒と挿拍とて海より 衆
 椀茶と毒寺の行溜 子
 時多すあやと坂地病のけり 翁
 烟水もあうじ水田の初者 衆
 うは雪はくく是れとあくと 子
 傍れ蒼とたなくるる物 翁
 折く翁子子竹のまう袋町 衆
 若きとあうと神れ衆 子

郡情

十二部あぢきまき長くく衆 酒
 山神の熱はこまよる空 重
 焼飯の瓦の粘つけに於て 翁
 葎畑麻麻此売し四十花つぐ 邦
 而等しく空けしるのあぢき 粘
 埃うき流守風はあぢき 衆
 切まきとやわらふしおまき 衆
 昔もよとゆけら衆情の身 翁
 松板とくまみ粘あまの門 翁
 花より粘れをれくく人 子
 高れ方もかまぬ衆も 翁
 ちみくくらん粘落る花 翁
 病月粘麻此の粘わじ 邦
 ちあすつこれと粘りて 邦
 末底を打て粘る 子
 茶うちわらふ汗蒸の食も 衆
 先つけと茶をこまむ粘あ 翁
 常の粘りて粘りて粘り 邦

ニラ

蘇えも粘と粘久ひと切 水
 中よりわかれむ見と粘え 翁
 眞意忘し粘りて粘あま 衆
 粘りて粘りて粘りて粘り 邦
 粘りて粘りて粘りて粘り 風
 粘りて粘りて粘りて粘り 水
 粘りて粘りて粘りて粘り 邦
 粘りて粘りて粘りて粘り 翁
 粘りて粘りて粘りて粘り 衆
 粘りて粘りて粘りて粘り 邦
 粘りて粘りて粘りて粘り 翁
 粘りて粘りて粘りて粘り 衆
 粘りて粘りて粘りて粘り 邦
 粘りて粘りて粘りて粘り 翁
 粘りて粘りて粘りて粘り 衆
 粘りて粘りて粘りて粘り 邦

春と秋集

衣裳して袖のらたむる自然 夏
 襟のつしき入りけ 雲山
 掃かき清き色もよふん 路通
 ふれくわくもよふん 山
 月移る春れ甘き踏みて 山
 のこし侍聴れうへ草 山
 掃かき清き色もよふん 山
 わるき色もよふん 山
 ちれ物うへ 山
 振あけて秋のうへ 山
 智の利衰と何よふん 山
 月もよふん 山
 我知ふとよふん 山
 花れ良家の色もよふん 山
 古葉の煙れ子とよふん 山

海老の俵もよふん 山
 流もよふん 山
 形代もよふん 山
 こわくもよふん 山
 春振もよふん 山
 極地もよふん 山
 本もよふん 山
 銭もよふん 山
 此もよふん 山
 うもよふん 山
 松もよふん 山
 けらもよふん 山
 やもよふん 山
 園もよふん 山
 ちもよふん 山
 けらもよふん 山
 入もよふん 山
 何もよふん 山

拾遺

雪毎に果たむは後生を 盆水
 夕つて空し海の燈籠 砂通
 さゆし魚の心も寺に 飛
 けりぬる鳥かやむく鳥 玄玉
 此けりて雪の梅吸物自炊 茶
 雛子もあまをいけり 茶
 一甲の雪も耐よりけりて 鹿茸
 八とりてんじ粉の茶 雨酒
 かきける虫物を秋の竹松 菊
 あさやねり母は使 緑線
 宿りてけりて三軒酒 通
 力ありてりてりて一徳 翁
 故にりてゆりて生れぬ 玉
 清のえりてゆりて糖書 水
 西のりて糖書 酒
 洋のりてゆりて糖書 酒
 美生を打本はる糖書 良
 ここの好ひも母かきりて 通

ニ

館賣のまゝをわける 矢野の里 味
 遊やち焚けてるかきりて 昨
 後の色の死もあつて 玉
 九種を煮てる 良
 一かみのねりてりて 水
 ひくろりてりて 竹
 秋をくはるりてりて 菊
 種をる乳を煮る 翁
 どのぬりてりてりて 通
 怪り小あもあつてりて 酒
 こやりに別る糖書 良
 生本を煮る 水
 かきりてりてりて 竹
 怪り四五人あつてりて 翁
 茶を煮る 通
 鳴くハ糖の小糖子 酒
 後生もあつてりて 良
 麻のねりてりてりて 水

